池田自然史博物館

◆ 頂　点 ◆









河川には、当然の事ですが水が流れ、その命の源ともいえる水を求め多くの生物が集まってきます。河川の生態系は、その水に支えられ実に多種多様な姿を形成しています。生態系を考える場合、みなさんも一度は目にしたことがある「生態ピラミッド」を思い描いてください。ピラミッドの頂点、最上位には捕食者の猛禽類が位置し、下位に向かって哺乳類、爬虫類、両生類、魚類、昆虫類、植物…と繋がっていきます。これは、“食う・食われる”の「食物連鎖」の関係から構築されるものですが、一つの種が一つの種だけを捕食するわけではなく、複数の種を選択したり、逆に下位の種が上位の種を捕食する場合があるなど、鎖で繋がったような単純な図式ではないため、近年では「食物網」という言葉を使います。

さて、淀川で「頂点」に位置する猛禽類としては、主に魚類を捕食する『ミサゴ』や鳥類・小動物・昆虫類等を捕食する『チョウゲンボウ』『ハイタカ』『ハヤブサ』などが生息しています。その中で今回紹介するのは『ミサゴ』です。河川敷に立って上空を見上げれば、白地に黒っぽい模様の羽を持つ『ミサゴ』が、川の流れに沿ってゆったりと飛翔する姿に出逢えます。ただ目は水面を鋭く見つめ、エサとなる『コイ科』や『ボラ』などの大型の魚類を探しているはずです。エサを見つけると、空中でホバリングしながら体勢を整え、狙いが定まると一気に降下して体ごと水面に突っ込み、大きく強靭な爪でガッシリと獲物をつかんで、飛び立っていくのです。

「生態ピラミッド」において、上位の猛禽類が多種多様であるということは、エサとなる下位の生物も数多く生息している、つまり、支えるピラミッドの裾野が広く安定しているということで、その場所の環境がとても豊かであるという証拠なのです。

環境省　環境カウンセラー
NPO法人　nature works

池田　哲哉

来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



淀川の生物多様性をテーマに河川レンジャー活動をしているが、これまでは水生生物ばかりを調査していた。それがヒョンなことから陸生の昆虫を本気で捕ることに。5月頃から始めたが、ようやく虫を見つける目が養われてきたと感じる。魚を捕る場合は下を向いてばかりだが、今は上を向いている時間が長い。「テントウムシ、2つ星と4つ星は違う種類なのだろう」と子どもの頃から思い続けていたが、実はナミテントウの翅の紋様は様々なパターンがあるそうだ。それと、もうひとつ。幼虫の頃にはすでに星が出ているではないか。知らないことを知る楽しみ。淀川で増えた。（編集長・石山郁慧）

川と人　人と人を結ぶ
淀川管内 河川レンジャー
VER RANGER

デザイン監修：NPO法人nature works　泉野幸彦・ありさだあきよ
イラスト監修：NPO法人nature works　小村一也
取 材 協 力 ：人を自然に近づける川いい会
発 行 支 援 ：国土交通省 淀川河川事務所

バックナンバーは、http://npo-natureworks.net/　の「無料の資料」からダウンロードできます。

淀川自然画報

2015年7月号　No.14

淀川水系の生物多様性を
見る・知る・楽しむ
生きものシグナル

YODOGAWA SHIZEN GAHO

水辺の博物誌



蒼い鎧を纏ったスズメバチの天敵

オオセイボウ　*Stilbum cyanurum pacificum*

美しいメタリックブルーのオオセイボウ(大青蜂)は、体長20㎜程度の小さな昆虫です。まるで宝石のような可憐な姿ですが、実は私たちにとって危険な昆虫の代表選手であるスズメバチの天敵です。スズメバチが泥で作った巣に穴をあけて、そこにいる幼虫に自らの卵を産みつけます。卵はやがて孵化し、オオセイボウの幼虫はスズメバチの幼虫を餌とするのです。スズメバチの親は当然、必死で攻撃しますが、オオセイボウの体は鎧のように強固で、スズメバチの毒針も平気。初夏から秋口、淀川水系の野山では、スズメバチとオオセイボウの攻防戦が観察できます。（画 / 鎌倉朝子）

発行責任者　淀川管内河川レンジャー・石山郁慧

under the water

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史

淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

カワバタモロコ

Hemigrammocypris rasborella



コイ科の小型の淡水魚です。分布は、静岡県以西の本州、四国、九州北西部に不連続に分布している日本固有種。平野部の小川やこれに続く湖沼や水路の、流れのほとんどない水草の繁茂しているような場所に生息しています。全長は飼育下では最大約7～8cmで、自然界においては少し小さく約3～4cmです。繁殖期の雄は、体色が金色になり、地方名でキンジャコ、キンタなどと呼ばれ、大変美しくなります。雌の方が雄よりも大きく成長し、また体高も高くなります。食性は雑食性で、付着藻類や水生昆虫など何でも食べます。繁殖期は、5~7月で、成熟した1尾の雌を複数の雄が追尾して浅場の水草に卵（卵径約1mm）を産みます。卵から孵化した仔魚は、日本産コイ科魚類中、ヒナモロコとともにもっとも小さく、全長は約3mmです。生息地の改修や、宅地化による池沼の埋め立て、外来魚の侵入による捕食などにより、生息が確認されている15の府県すべてで、現在レッドデータブックに記載されており、絶滅の危機にひんしています。愛知県豊田市と西尾市では、市の天然記念物に指定されています。





金色に輝く美しい魚群れが動くとさらに煌めく

花想鳥感

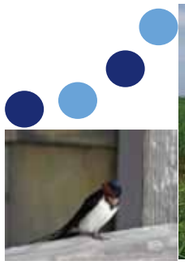
四季折々、水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館　主任学芸員
高田 みちよ

ツバメ

この季節、みなさんの家の周りや商店街などでツバメが飛び交っていることでしょう。大阪府にツバメは4種類います。ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、ショウドウツバメです。このうち、ショウドウツバメだけが渡り鳥として通過し、それ以外の３種は府内で営巣します。

そのうちでもツバメは住宅や駅、商店街など、人の出入りの激しい、至るところに巣をつくります。本当は建物の外側よりも、人家の内側で人と一緒に暮らすのが好みらしいですが、糞や寄生虫のこともあり、一緒に暮らすのは少々難しいようです。４～６月に巣をつくるツバメたちはおおむね２回子育てをし、多ければ３回子育てをします。鳥にとっての巣は子育てのための「ゆりかご」であり、家でもベッドでもありません。一人前になった子どもと卵やヒナを温める必要のなくなった成鳥たちは、巣ではなく、ねぐらで夜を過ごします。ツバメの場合、好まれるねぐらはヨシ原です。関西で最大のねぐらとなっているのが鵜殿のヨシ原で、３~４万羽が寝に来ます。日没前の３０分ぐらいから、夕暮れ空に三々五々集まってきたツバメたちがヨシ原の上空をぐるぐると飛び回り、意を決したようにヨシをめがけてパラパラと下りていきます。淀川で水を飲んだり水浴びをする個体もあります。そして、８月後半から９月下旬ぐらいまでに、徐々に南方に渡っていき、ねぐらは消滅していきます。





これだけ身近で知られているツバメですが、渡った先でのことはよくわかっていません。いったいどういうルートで渡っているのか、冬はどこでどうやって過ごしているのか、オスとメスの関係は冬も継続しているのか、などなど、ツバメにはわからないことだらけです。

このツバメたちが夜を安全に過ごす鵜殿のヨシ原が、今、危機に瀕しています。第二名神が平成35年に鵜殿を通過することが決まっています。この巨大道路がツバメにどう影響するかはわかりません。皆さんの身近な野鳥であるツバメの今後を見守ってください。

the waterside

the sky & land

水辺の虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省　環境カウンセラー　川島 大助

甘い香りのアメンボ

アメンボ類はカメムシ目に分類される昆虫のうち、長い脚をもつ水上で生活するタイプの総称で、熱帯～亜寒帯まで広く分布しています。淀川流域では、本川、ワンド、たまり、池、水田、用水路などの水域に生息しています。また、雨の後に一時的にできた水たまり（市街地の道路、駐車場、グランドなど）でも、しばしば見ることができます。

本種は6本の脚のうち、中脚と後脚が細長く（前脚は短い）、この4本の脚で身体を支えて、水の表面張力を利用して水面を蹴り滑るように移動します。成虫は水際の植物や石などに産卵し、卵→幼虫→成虫の成長過程で、幼虫（翅なし）と成虫（翅あり）はほぼ同じ姿をしていますが、成虫は飛んで移動することができます。幼虫、成虫ともに肉食性で落下昆虫や魚の死体などに口吻を突き刺し、消化液を注入し、消化された液体を吸汁します。

またアメンボは獲物が水面で動いて発生する水面波を感知し獲物を掴んで捕らえるおもしろい習性があるため、人が水面を小さく叩いて波紋を作ると、その中心にアメンボが近寄ってきます。そのとき、タモ網を素早く操ることで採集できます。触れてみると名前の由来でもある『飴』の匂いを放ちます。特に雨の多い梅雨時期は市街地の水たまりなど、色んなところでアメンボの姿を見ると思いますので、身近なアメンボをぜひ観察してみてください！

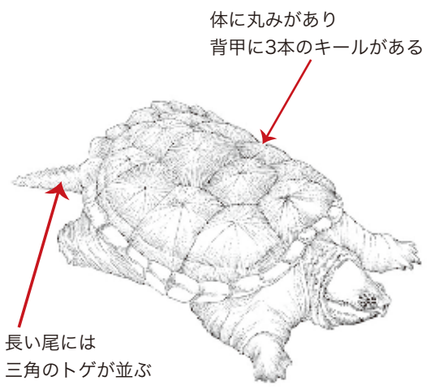
水面を優雅に泳ぐ姿は見ていて飽きない



the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100



AN INVADER

カミツキガメ科　**カミツキガメ**

Chelydra serpentina



淀川管内河川レンジャー　石山 郁慧

今回は、和亀保護の会の西堀智子さんに執筆をお願いし、写真もお借りしました。同じ川で活動する男前（?）の研究者です。

米国からペットとして輸入された個体が遺棄され、それが日本各地の川や池で釣られたり、住宅地を歩いているのが発見されたりしてニュースになっている。現在千葉県の印旛沼周辺と静岡県で繁殖が確認されているが、大阪でも5月に摂津市で見つかった個体は野外で繁殖したと思われる若い個体であった。雑食性でカメさえも食べる。背甲長50cmと大型に成長するため、たとえ少数でも環境に与える影響は大きい。むやみに咬みつくわけではないが、首の動きはカメとは思えないほど俊敏で可動範囲が広く、爪が発達し、非常に力も強いので、ハンドリングには十分な注意が必要である。



川で見つけても
触らないように!!

